

よりも「後で悔むような選択をしなかったか」ということの方がより重要である。著者はハイデッガーとサルトルとのいずれが優るかについては何も言わない。ただいずれの説も、人間のこの永遠の問題に対する伝統哲学の解答に飽き足りない人に向けられたものであり、いずれもその主張者のある種の卒直さと勇気を示している、と言うに止まっている。そして現代生活に絶望した人々はこれらの説を「人間精神のヒロイズムの記念碑として受け入れるだろう」と附加している。(p. 212)

以上がこの本の極めて粗雑な概観である。サルトルが中心となっていることは、ハイデッガーやヤスペルス等を通して実存主義に接している人には不満であろうし、またアングロ・サクソンの視野からの解説が入門書としては目立ち過ぎるという非難もあり得よう。しかし英米哲学と実存主義との対照という点では大変興味深い労作である。著者は実存主義をば、プラグマチズム等の見地からしばしば痛烈に攻撃する。ところでその攻撃を通して実存主義に対する多くの同感がうかがわれる。著者はこの入門を通して、実存主義とプラグマチズムとの総合を目指している、と言っ言えないことはない。実存主義はアメリカに受け入れられると、案外、アメリカの伝統と言われる清教徒的な開拓者精神につながって行き得るのではなからうか。

なお著者はソルボンヌとミシガン大学とに学んだ人であり、現在 Rutgers 大学で教鞭をとっている。

(筆者 京都大学教養部助教授)

Winspear, A. D., *Lucretius and Scientific Thought*. Pp. 156, Montreal, 1963

北嶋美雪

De Rerum Natura (以下 D. R. N. と省略) の著者ルクレチウスは、すぐれた詩人としての位置はゆるぎないものとして確立されているにもかかわらず、この詩に盛られた「思想」という知的な面となると、一八世紀になって漸く脚光を浴びはじめたとはいうものの、彼を単なるエピクロスの翻訳者と思倣せうとする傾向は依然として続いていると考えて、今こそこの誤りを正し、ルクレチウスの思想の獨創性と眞の深みを明らかにしようというのが本書の意図である。

ルクレチウスの思想の「獨創性」とは、ではどこにあるのか。それは D. R. N. に叙述されていることがごとごとく彼の新しい発見であるということの意味するのでは無論ない。それはまず、先行者から散文の形でヒントを与えられたものを、豊かな詩的想像力と熱情とをもって開花させた点に、第二に、彼が依拠する哲学の立場の意義を誰よりも明確に察知した知性の力という点に、つまり宇宙の神的創造の説を徹底的に斥け、その進化論的、反目的論的、反神学的な見方を誰よりも推進させた点に、そして最後に、この世界観を動植物や人間にも適用し、生物及び社会の進化という考えを提出したという、以上の

三点にあると著者は考へる。

この「進化」の思想は、一九世紀後半にダーウィンの進化論が西欧世界にいかにか大きな衝撃を与えたかを想起するとき、ルクレチウスの思想的な地位は非常に重要なものと言わなければならない。もっとも「種の進化」の考へは彼にはないけれども。「自然淘汰」や「種の保存」はルクレチウス以前に既にエンペドクレスにあったと人は言うかもしれないが、しかしこのことに對する両者の理解の態度は全く異なり、それは却つてルクレチウスの獨創性を証明する証拠となる。また「宇宙の進化」にしても、D. R. N. と対応する個所をエピクロスに見出すことができるかもしれないが、ここでもルクレチウスの説明は、エピクロスの解説をはるかに越えるものである。社会の進化という面でも同様のことが言える。要するにルクレチウスは進化の思想において先人にはない獨創性を示し、しかもその科学的、理性的理解によつて、一九世紀を予料しているのである。

以上は第一章の *The Originality of Lucretius* の概論的に、また最後の第七章——本書の約半分を占める——の *The World Outlook of Lucretius* の後半で D. R. N. 第五卷に即して述べられていて、本書の一つのポイントをなすものである。が同時に第七章前半に、ルクレチウスの科学思想を宇宙論の面で、近代科学の以上とは別の視点から照明をあてているもう一つのポイントがあつて、ここでは局部的にはおもしろい議論も見られる。

今日の原子物理学では核分裂や核融合の事実が実証され、また原子の内部構造が明らかにされるに及んで、アトムは不可分割的であるとのルクレチウスの説は変えられなければならないにもかかわらず、しかし *atomic hypothesis* そのものは主要な点で依然として固執されるべき有効性を保っている。また彼が、感官知覚への絶対的信頼に基づいて、「実験室において実験器具を用いて行つた実験」という仕方での検証の手段を持たない古代にあつて、「観察」という唯一の方法によつて、近代科学の世界観を予料しているのは驚嘆に値する。変化は物の終極的な法則であること、つまり物の世界は常に變化すること、そして世界は物そのものの法則に支配され、神の奇蹟は起り得ないこと、これは科学者ルクレチウスの自然に對する鋭い洞察であり、一八世紀を先取した科学的世界観である、と著者は言う。ただしここ第七章前半の議論では、エピクロスとルクレチウスは一体化されていて、ルクレチウスの「獨創性」の点は閑却されているようである。

ところで本書の特色はまだこれまでのところにはないと言つてよい。このような紹介では、恐らく著者からの換骨奪胎の諷りを免れないであろう。というのは以上の叙述を裏打ちし、且つルクレチウスの伝記、時代を述べた二、三章に集中的に、四五、六章の D. R. N. の社会思想、倫理思想を扱っている個所でも折にふれて現われてきて、本書の一貫したアクの強い特色をなしているのは、著者の *materialist* としての立場なのである。つまり著者がルクレチウスを賞揚するのは、ほかでもない

い、彼がローマの革命期にあって民主陣営に味方して、封建的、貴族的の社会を擁護する観念論的思想家と、唯物論者として敢然と戦ったからなのである。

そのような著者の立場を示す具体例を挙げると、上に述べた「変化は物の終極的な法則である」との自然観をルクレチウスが確立したという所説にしても、これがイオニアの哲学者ヘラクレイトスに由来する必然性を説き、そして、「古代の materialism の歴史はヘラクレイトスの体系の衰退であり補綴である」と断じ、変化の背後に何か不動なものを見出そうとするのは、「財政的にであれ、感情的にであれ、道徳的にであれ、大きな既得権を持つ人」の真情であって、その権利を変えられることへの恐れと嫌悪が不動なものへの憧れに形を変え、これを観念論哲学者が真善美とか、永遠とか、イデアとかいうことで正当化したのだと言うのである。

この種の余りにも公式的な見解や、公式的用語がいたるところに充満しているのは、いささかうんざりさせられた。折角浮彫りにして見せてくれようとするルクレチウスの科学思想を、このような執拗にすぎる著者の立場からの潤色で著しくぼかし、説得力を弱めているのは惜しまれる。

最後に微細なことながら、テキストの読みの点に一つだけ触れると、原典、

*sic animi natura nequit sine corpore oriri
sola neque a nervis et sanguine longius esse.*

(D. R. N. Bk. 3, 788 ff.)

の 'modernize' したという著者の訳は、

So mind cannot ever be without the brain.

No consciousness apart from blood and cells.

である。因みに C. Bailey 訳を参考までに引用すると、

*So the nature of the mind cannot come to birth alone
without body, nor exist far apart from sinews and blood.*

となる。

著者の議論とルクレチウスその人との距離が、これでさほどかけ離れていなければ幸いである。

なお附言すれば、一々指摘する余地はないが、誤読、文脈からの逸脱と思われる個所が幾つかあり、引用個所のミスプリントは十指にあまっても、厳密な読者には煩わしいかもしれない。

(筆者 学習院大学講師)